

# Matching tag に伴う含意について

——「関連性理論」の枠組みで——

松尾文子

## 1 はじめに

付加疑問文には形式の上では肯定X否定、否定X肯定の *contrasting tag* と、肯定X肯定、否定X否定の *matching tag* とがある<sup>1)</sup>。 *Contrasting tag* には頻繁に出会うが、 *matching tag* は学校文法では非文法的であるとされる。しかし、 *contrasting tag* よりはるかに少ないとはいえ、実際に用いられる。

- (1) Your mother's at home, *is she?* —Swan (1980 :\$515)  
(2) This is the last bus, *is it?* — *ibid.*

ここでは主節で推測を表し、付加部でそれが正しいかどうかを尋ねると説明されているだけである。

*Contrasting tag* と *matching tag* の違いについては次のように述べられている。

- (3) The book is obscene, *is it?* —Cattell (1973 : 615)  
(4) The book is obscene, *isn't it?* — *ibid.*

(3) の *matching tag* では、話し手がその本を読んだことがない、読んだが内容を忘れた、あるいはわいせつの法的定義が定かではないような状況で用いられる。すなわち、話し手は自分の意見として提示しているのではなく、聞き手にそれが彼の意見なのかどうかを尋ねるために引用している

場合が考えられる。一方、(4) の contrasting tag では、話し手は自分の意見を提示し、聞き手に同意を求めるような状況で用いられる。

Matching tag に伴うニュアンスに関して、多くの文献では不信、皮肉、反駁、非難、怒りや驚き、興味などをあげている。

本論では、何故 matching tag には contrasting tag にはない含意が生じるのか、Sperber & Wilson の「関連性理論」(Relevance Theory)を利用して考察していく。

## 2 音 調

Matching tag の音調に関して Quirk *et al.* (1985) では次のように記されている。

(5) Your car is outside, \ is it? / — Quirk *et al.* (1985 : 812)

(6) So he likes his job, \ does he? / — *ibid.*

その他いずれの例でも下降調+上昇調の型になっている。また、Hudson (1975:27)にも“intonation on constant-polarity tag has to rise”とある。しかし、常にそうであるとは限らない。

(7) I'll get my money back, \ will I? /  
(=I don't believe it.) —Alexander (1988 : 258)

(8) So she's getting married, \ is she? / (= Tell me more.)  
—Yes, she's got engaged to a doctor. The wedding's in June.  
— *ibid.*

(9) You sold that lovely bracelet, *did you?* \  
(=I'm sorry you did.) — *ibid.*

(7) は Quirk *et al.* の例と全く同じパターンで、そうは思えないけれどという疑念を表す。(8) では主節の音調は明記されていないが、付加部は上

---

昇調で、もっと聞きたいので話を続けて欲しいというニュアンスである。一方、(9)では付加部は下降調で、話し手は残念な気持ちを抱いている。付加疑問文ではなくても疑いの気持ちがあれば上昇調になるし、相手に発言を促す場合でも同様である。それに対し、(9)のように感嘆文的な機能があれば下降調になる。Matching tag も contrasting tag と同様に、上昇調で発話される場合もあるし、下降調の場合もある。

### 3 英米における差異

Matching tag は英米でその用法に関して違いがあるのだろうか。

(10) That's your new house, *is it?*

—Celce-Murcia & Larsen-Freeman (1983 : 162)

(11) The party's next Wednesday, *is it?*

— *ibid.*

肯定X肯定の型に関してであるが、次のように記されている。米国より英国の方が多く用いられる。何らかの感情を表すというより、単なる確認の機能を持つ。したがって、英国人と米国人との会話では誤解を招く原因にもなりうる。

他の文献では特に記述はない。

### 5 Matching tag に伴う意味合い

Matching tag になることによってどのような意味合いが生じるのだろうか。

まず、相手の言葉の繰り返し、あるいは相手の言葉を問い返す場合がある。

(12) Claude is rich, *is he?*

—Cattell (1973 : 615)

(13) Claude is rich, *isn't he?*

— *ibid.*

AとBの会話で、Aの言葉の最後の部分が‘Claude is rich.’であったとする。BがAの言葉を繰り返すときには matching tag の (12) が適切であり、(13) のように言うとAはBが話をよく聞いていなかったと思うであろう。

(14) John: I've just heard that Fred's in the hospital.

Mary: He's in the hospital, is he? Well then we ought to go  
and visit him. — MaCawley (1987 : 247)

名詞が代名詞に置き換えられるなど、一部変更されることもあるが、(14)でも Mary は John の「彼は入院中だ」という部分を繰り返している。

話し手の強い感情が表されることもある。次は皮肉、および非難の例である。

(15) “.... I'm your God.”

“Doctor, listen to me —”

“Oh now it's doctor <sup>2)</sup>, is it?” —D.Martin, *Bring Me Children*

(「私はお前にとっては神なのだ」「博士、聞いて下さいー」「へえ、今度は博士ときたな」)

(16) “Is my friend getting on well here?”

Mrs Fujiwara followed my gaze towards the kitchen. Then she turned to me again and said: “I expect so. You're good friends, are you?” —K.Ishiguro, *A Pale View of Hills* (「私の友人はきちんとやっているのでしょうか」フジワラ夫人は私の視線を追って調理場の方を見た。それから再び向き直り言った。「そうだといひんですけどね。あなたたち、親友なんですよね」)

(15)の doctor は殺人鬼。Lyon を今にも殺そうとしている。彼は直前にも「ちょっと待ってくれ」と懇願している。前の例と同様に相手の言葉を繰り返しているが、ここでは今度はごていねいにも doctor と呼ぶのか、と皮肉

---

が込められている。(16)では、最初のセリフの話し手がうどん屋を営んでいるフジワラ夫人に友人を雇ってもらうように頼んだ。その友人の様子をうかがいに来たが、彼女の性格を知っているだけに心配である。フジワラ夫人の親友ならわかるはずだ、うまくやっているわけないわよ、という皮肉、何故そんな人を紹介したのかという非難の気持ちが感じられる。表される感情は皮肉や非難のようなマイナスの感情ばかりではない。

(17) So you're going to become a doctor, *are you?* That's splendid.

— Declerck (1992 : 191)

(18) So you're getting married, *are you?* How nice!

—Swan (1980 : 515)

いずれも後続の文からわかるように、すばらしいというプラスの驚きを表している。

次に、相手の言葉や状況からこういうことだと思うが、と推論の結果を表す例を見る。

(19) “And what are you doing with yourself these days, dear?” she asked Niki.

“Me? Oh, I live in London.”

“Oh yes? And what are you doing there? Studying?”

“I'm not doing anything really. I just live there.”

“Oh, I see. But you're happy there, *are you?* That's the main thing, isn't it.” —K.Ishiguro, *op. cit.* (「最近、どうなさっているの」

と彼女はニキに尋ねた。「私？ ロンドンで暮らしてます」「あら、そうだったの。で、何なさっているの？ お勉強かしら」「別に何もしてません。ただ、そこで暮らしてるだけです」「なるほどね。でも、お幸せなのよね。それが大切なことじゃないかしらね)」

(20) “I suppose, Niki, you don't have any plans yet to be getting

married?"

"What do I want to get married for?"

"I was just asking."

"Why should I get married? What's the point of that?"

"You plan to just go on —living in London, *do you?*" —*ibid.*

(「ニキ、まだ結婚する気はないの?」「何のために結婚したいと思えていうの」「ただ聞いただけよ」「どうして、結婚しなきゃならないの? 結婚の目的って何なのよ?」「ただロンドンに継続するつもりだってことなのね」)

ニキはいなかの親元を離れ、ロンドンで生活している。年頃にもかかわらず、特にこれといった目的も持たず都会でブラブラしているのが母親にとっては気掛かりである。(19)は母親の友人がニキに近況を尋ねている。友人はニキの答えを聞いて、「お勉強なさっているの」などといらぬことを言わなければよかったと後悔する。その場をとりつくろうために、本心ではないにしても「見たところ楽しくやっているようだ」と推論し、そう言う。(20)はニキと母親の会話。母親は娘の言葉から考えると、娘は結婚せずにロンドンに継続するつもりなのだと言論する。非難の意も込められている。

これまでの例から明らかのように、matching tag の前に *so* や *oh* が用いられることが多い。*so* は推論結果を導入し、*oh* は情報を受け止めたことや驚きなどの強い感情を示す語である。

(21) *So* your car is outside, *is it?* — Quirk *et al.* (1985 : 812)

(22) "I see. *So* you're saying they should desert their children, *are you*, Niki?" —K.Ishiguro, *op. cit.* (「わかったわ。じゃあ、彼女達は子供を捨てるべきだというのね、ニキ」)

(21)では先行文脈は示されていないが、皮肉を込めた反駁であると注記されている。(22)は先述の結婚に反発する娘ニキと母親の会話での母親の言

葉。ニキは先に多くの女性が子供や夫の世話で人生を潰していると主張した。そこから母親は so 以下の結論を導き出す。ここでも娘に対する非難の気持ちが入められている。(6) (8) (17) (18)でも so が用いられている。

(23) *Oh, you've had another accident, have you?*

— Quirk et al. (1985 : 812)

ここでは説教のニュアンスがあると記されている。他に (15) の例でも oh が現れている。

以上, matching tag では皮肉, 非難, 驚きなどさまざまな感情が表されると述べてきたが, 同じ表現でも文脈によって意味合いが変わることに注意したい。

(24) *This is your seat, is it?*

— Hudson (1984 : 6)

問題の座席をめぐる話し手と聞き手が争う場面を想定してみる。これは自分の席だと相手が主張したのに対して, 「これがあなたの席だって?」と相手の言葉を話し手が繰り返すと攻撃的な非難になる。一方, 特に争うような状況になく, 相手が自分の席だと言うまでは話し手がそのことを知らなかっただけならば, 単に相手の言葉を反射的に繰り返すだけで, 「そうなんですか」ぐらいのニュアンスになる。

## 5 Matching tag の特徴

Matching tag に何故先述のような意味合いが生じるのかを説明する前に, contrasting tag と matching tag の違いを見ておく。

(25) a. *John drank beer, did he?*

b. *Did John drink beer, did he? (= a)* —Cattell (1973 : 616)

(26) a. *John drank beer, didn't he?*

b. \*Did John drink beer, didn't he?

— *ibid.*

自分の意見としてある命題を述べるときは陳述型になり、疑問型は不適切である。Matching tag の場合 (25b) のように疑問型をとれるが, contrasting tag の場合は不可能である。Matching tag では主節で自分以外の人の意見を述べるので (25b) も可能になる。

Hudson (1975) では次のように記されている。

(27) the sincerity condition for questions

The speaker believes that the hearer knows at least as well as he himself does whether the proposition is true or false.

(28) the sincerity condition for declaratives

The speaker believes that the proposition is true.

付加疑問文の特徴として三点あげられている。

- 1) 付加部は (27) に従う。
- 2) 主節は (28) に従う。
- 3) (27) (28) とともに同一の命題に適用される。したがって、付加疑問文全体の解釈は両条件に合うものである。すなわち, non-conductive な解釈は成り立たない。

Contrasting tag は常に negatively conducive (expecting disagreement) で, matching tag は常に positively conducive (expecting agreement) である。

(29) a. Caterpillars (really) have legs, *don't they?*

a'. Don't caterpillars (really) have legs?

- b. Caterpillars don't (really) have legs, *do they?*  
 b'. Do caterpillars (really) have legs? —Hudson (1975 : 27)
- (30) a. (Oh), caterpillars have legs, *do they?*  
 a'. (Oh), do caterpillars have legs?  
 b. (Oh), caterpillars don't have legs, *don't they?*  
 b'. (Oh), don't caterpillars have legs? —*ibid.*

Matching tag では、主節で話し手がその命題が真であると信じていることを(7で述べるが、信じているふりをすることもある)、付加部で話し手は聞き手がその命題が真かどうか少なくとも自分と同じ位は知っていると考えていることを示すが、話し手は聞き手に何かを告げようとするのではなく、'shared knowledge' (Hudson(1975:27)) を表す。

## 6 高次表意, 解釈的, エコー発話, アイロニー

本論で用いる「関連性理論」における上記の四項目に関して簡単に説明しておく。

発話により伝達される想定には表意 (explicature) と推意 (implicature) とがある<sup>3)</sup>。表意とは発話文の明示的意味, すなわち発話を構成する語の意味表示に曖昧性の除去 (disambiguation), 指示関係の付与 (reference assignment), 拡充 (enrichment) <sup>4)</sup>によって肉付けしたものである。これらはその発話に含まれる語の意味に直接的に依存する。推意とは伝達されてはいるが, 明示的でない想定で, 推意前提 (implicated assumption) と推意結論 (implicated conclusion) から成る。表意は推意の類推によって明示的に伝達されることになる。

(31) A: Did I get invited to the conference?

B: Your paper is too long.

(32) The article that the hearer has written is too long for the conference.

(33) If your paper is too long for the conference you will not be invited.

(34) Speaker A did not get invited to the conference.

—Blakemore (1992 : 124-125)

(31) において、Bの発話は文字通りの意味以上のことを伝達する。(32) がその表意、(33) が推意前提、(34) が推意結論で、推意前提を補って初めて導き出される情報である。

さらに、発話によって伝達される想定には高次表意 (higher-level explicature) もある。

(35) Mary (frankly) : I don't like you.

(36) Mary doesn't like Peter.

(37) a. Mary is saying frankly that she doesn't like Peter.

b. Mary believes that she doesn't like Peter.

c. Mary is admitting that she doesn't like Peter.

— Wilson (1994)

(35) の表意は (36) で、(37) は全て高次表意である。高次表意には mood indicator<sup>5)</sup>, illocutionary adverbial<sup>6)</sup>, illocutionary particle<sup>7)</sup>, attitudinal particle<sup>8)</sup>などがあり、話し手の命題態度を表し、命題の真偽値には貢献しない。付加疑問文の付加部は高次表意にあたる。

発話は話し手の思考を表記するために用いられ<sup>9)</sup>、表記には記述的 (descriptive) 表記と解釈的 (interpretive) 表記とがある。記述的表記とは現実世界の事象を記述するもので、命題形式を持ち、表記と表記されるものとの関係は真理条件的である。他方、解釈的表記とは他の命題形式、すなわち (誰かに) 帰属された (attributed) 思考の解釈を表記するものである。発話の命題形式は多かれ少なかれ伝達される思考の命題形式に類似

---

しているという点で、あらゆる発話は話し手の思考の解釈的表記である。話し手以外の誰かの、あるいは話し手の過去の思考の解釈として用いられた発話は、まず第一に話し手以外の人が自分の思考を解釈的に表記したものである。したがって、他の人の思考や話し手自身の過去の思考を解釈するために用いられた発話は、それ自体他の人や自己の思考をさらに解釈的に表記したものである。これを関連性理論では特に解釈的用法と呼ぶ。

第三者の思考を解釈する解釈的用法がどのように関連性を<sup>10)</sup>達成するかを考えるために、「エコー発話」という概念を導入する。エコー発話とは話し手が第三者の思考を思い浮かべ、それに対して自分がある態度を抱いていることを伝達する発話である。そして、何らかの態度を抱いているという事実を知らせることによって関連性が達成される。

エコー発話の一つに話法 (reported speech) がある。

(38) Peter: Have you read *the Sunday Express* today?

Mary: Yes. Britain must stay out of Europe at all costs.

— *ibid.*

Mary の発話は彼女自身の主張ともとれるし、*the Sunday Express* の主張をそのまま報告したものととも考えられる。後者がエコー発話である。ここでは、聞き手の Peter に *the Sunday Express* ではこう言っているという事実を知らせることによって関連性が達成される。

アイロニーも解釈的表記であり、エコー発話でもある。アイロニーの特徴は次のとおりである。

- 1) 非明示的な解釈的用法である。
- 2) 非明示的なエコー的用法である。
- 3) そこで示される態度は、エコーされる意見から話し手自身を切り離

した (dissociation) ものである。

エコーされる意見に対する話し手の態度に制限はない。

(39) He: It's a lovely day for a picnic.

[They go for a picnic and the sun shines.]

She (happily) : It's a lovely day for a picnic, indeed.

(40) He: It's a lovely day for a picnic.

[They go for a picnic and it rains.]

She (sarcastically) : It's a lovely day for a picnic, indeed.

— Sperber & Wilson (1986 : 239)

両例とも女が男の言葉をエコーしている。(39)ではエコーされる意見を是認していることが、反対に(40)では拒否していることが表明される。同じ発話でも表明されている態度が異なる。

## 7 何故、さまざまな意味合いが生じるのか

まず、6で述べたように、matching tagの付加部は高次表意であることを繰り返す。高次表意は命題に対する話し手のさまざまな態度を表すが、matching tagには何故これまで述べてきたような意味合いが生まれるのかを考えてみる。

Matching tagでは、相手の言葉を繰り返す場合があった。話法ではその内容ではなく、第三者の言葉に気付いたことを知らせることで関連性が達成された(24)(38)。また、単なる繰り返しではなく、エコーされる意見に対して話し手の何らかの態度が示される場合があった(15)(24)。

また、話し手の推論を表すこともあった。Wilson(1994)では、アイロニーの例として“Echoes of the thought behind the word”があげられている。

- (41) a. Peter: I think I'll have another gin.  
b. Mary: I wouldn't, if I were you.  
c. Peter (sarcastically) : Oh, right, I agree, *I'm getting drunk*.

— Wilson (1994)

cの斜字体部は本来ならMaryが言いたいことである。このように、実際に言葉にはされていない第三者の思考をエコーすることによって、アイロニーが表現されることがある。推論に話を戻すと、相手の言葉や状況からある推論結果を導き出して言葉にすることというのは、(41)と同様に、本来なら相手が考えているであろうことを話し手が勝手に、あるいは先回りして述べることになる。そして、そのことによって皮肉や非難のニュアンスが生まれる(19)(20)(22)。先に matching tag では主節で話し手がその命題が真であると信じているふりをすることもあると述べた。(19)では話し手は必ずしも“You're happy there”と信じているわけではないが、聞き手に対しては少なくとも表面上はそう信じているふりをし、実際はその意見から自身を切り離すことによって、軽い皮肉に似た感情が込められる。この引用部の後は“Yes, I'm happy enough.”と続き、ニキもまた皮肉で切り返している。

Matching tag によって表される態度には、皮肉、非難、反駁、攻撃、説教、驚きなど種々の感情がある。Sperber & Wilson(1986:240)は、“a speaker can use an echoic utterance to convey a whole range of attitudes and emotions, ranging from outright acceptance and approval to outright rejection and disapproval”とする。アイロニカルな態度は明確に下位区分されるわけではないし、そのような態度を表すアイロニカルな発話も明確に下位区分されてはいない。結局のところ、アイロニーは第三者の思考や言葉を繰り返し、同時にエコーされた意見を拒否する場合に生じる。(17)(18)(39)ではエコー発話によって是認の態度(echo with endorsement)が表され、それがよい驚きになる場合もある。

## 8 否定 X 否定の matching tag に関して

これまで肯定X肯定の型の matching tag について述べてきたが、否定X否定の型は一般にごくまれにしか用いられず<sup>11)</sup>、攻撃的で脅迫的なニュアンスを含むとされている。

(42) So caterpillars *don't have* legs, *don't they?*

—Hudson (1975 : 25)

(43) So he *doesn't like* his job, *doesn't he?*

— Quirk *et al.* (1985 : 813)

(42)では話し手が疑い深いことを含意し、非常に攻撃的で挑戦的だとする。このようなニュアンスになるのは何故であろうか。

(44) a. What a long way he's gone!

b. Hasn't he gone a long way?

—Hudson (1975 : 14)

bのn'tはnotの縮約形ではなく、感嘆文のマーカである<sup>12)</sup>。したがって、aとbはほぼ同意になる。助動詞とnotの縮約形が主語の前に置かれた疑問文では、話し手は命題の真偽をすでに知って(いると思って)いて、聞き手もそれを知っていることを期待している、すなわち、話し手は相手に同意していることが示される。したがって、否定X否定の型では主節で命題の真実性を否定しておいて、同時に否定した主節の命題内容を念押ししていることになる。(43)では、『彼は仕事が好きでない』ということかいの意になる。通常、このようなきつい、攻撃的な言い回しが避けられるのは当然であろう。

しかし、単に相手の言葉を繰り返すだけの場合はそのようなニュアンスは生じない。

(45) John: ... and Sue hasn't graduated yet.

Harry: She *hasn't graduated* yet, *hasn't she?*

—Cattell (1973 : 616)

(46) I *can't* , *can't I?* (in a response to a statement such as “You can't sing an aria from *Aida*<sup>13)</sup>!)

—Celce-Murcia & Larsen-Freeman (1983 : 162)

否定X否定の型がまれにしか用いられない理由は特に解明されていないし、Cattell(1973)も次のような例をあげるだけで、その理由はわからないとしている。

(47) \*Didn't John drink beer, didn't he? —Cattell (1973 : 616)

(48) \*Isn't that a pretty dress, isn't it? — Hudson (1975 : 8)

(25) と比較されたい。

## 9 おわりに

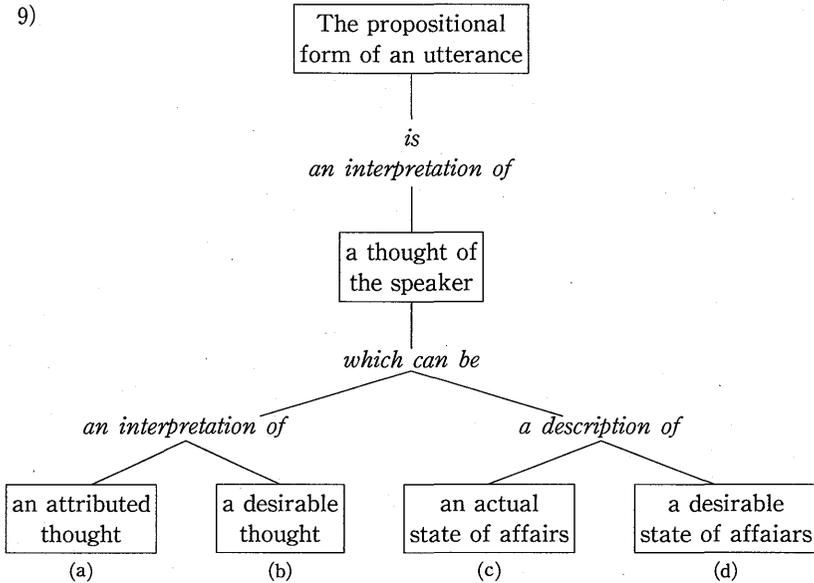
Matching tag では相手の言葉を繰り返すことがあるが、これは解釈的用法の一つであるエコー発話の中の話法によって説明できる。第三者の思考や言葉を繰り返したり、推論によってそれを導き出して述べることによって命題に対するさまざまな話し手の態度を表すことができる。これも matching tag をエコー発話であると考えれば解決できる。多くの場合、表明される態度はアイロニー（皮肉、非難、反駁のようなもの）であるが、第三者の思考や言葉を繰り返し、同時にエコーした意見を拒否する場合に生じるのがアイロニーである。また、是認の態度が表明されることもある。

本論では関連性理論のエコー発話、アイロニーといった概念を応用することで、従来説明されていなかった matching tag に伴う含意と、何故そのような含意が生じるのかを明らかにした。

脚注

- 1) contrasting/matching tag を Huddleston (1984) では reversed/constant polarity tag, Cattell (1973) では contrasting/matching tag と呼ぶ。また, matching tag を Declerck (1992) では same-way tag, Celce-Murcia & Larsen-Freeman (1983) では marked tag, Swan (1980) では same-way question-tag と呼ぶ。
- 2) 原文ではイタリック体。
- 3) 詳細, および Grice らの what is said と what is communicated, 慣習推意と会話推意などとの違いは, Sperber & Wilson (1986), Blakemore (1992) を参照されたい。
- 4) 曖昧性の除去: 多義的な語の語義を一つに限定すること。
  - (1) A: Did you enjoy your holiday?  
 B: The beaches were crowded and the hotel was full of *bugs*.  
 この bug は「虫」や「盗聴器」ではなく他の行楽客を指す。  
 指示関係の付与: 代名詞などの指示表現の指示物を同定する。  
 拡充: 情報を膨らませることによって, その発話の意味表示を拡充 (enrich) する。
  - (2) The park is some distance from my house.
  - (3) The park is farther from my house than you might think.  
 上の (2) から (3) を得る過程。つまり, 自宅と公園がわずかでも離れていれば (2) は真であるが, その意味で (2) を発話することはまずない。通常, 話し手は (3) のつもりで (2) を発話する。  
 以上, Sperber & Wilson (1986), Blakemore (1992)
- 5) *Leave!*; *Why leave?*; *What an idea!* — Wilson (1994)
- 6) *Frankly*, I don't believe you. — *ibid.*
- 7) *Please* don't leave.; You're leaving, *eh?* — *ibid.*
- 8) That's a nice dress — *not.*; He's here, *alas*. — *ibid.*

9)



—Sperber & Wilson (1986 : 232)

それぞれ, (a)アイロニー, メタファー (b)疑問文, 感嘆文 (c)断定文 (d)命令文, がそれに該当する。

10) Principle of relevance

Every act of ostensive communication communicates the presumption of its own optimal relevance. —Sperber & Wilson (1986 : 158)

(すべての意図明示的伝達行為はその行為全体の最適な関連性を見込みを伝える—内田他訳)

最小の処理労力 (processing effort) で最大の文脈効果 (contextual effect) を得ることによって, 最適な関連性が生じる。詳細は Sperber & Wilson (1986) を参照されたい。

11) Quirk *et al.* (1986 : 813) は論理的には可能だが実際は用いられないとする。

12) (4) a. John drives slowly.

b. Yes, does *'n't* he? —Hudson (1975 : 20)

ここでも, *n't* は否定のマーカーではなく, 感嘆文のマーカーである。

(5) a. John doesn't drive fast.

b.\*No/Yes, does ( *n't* ) he? —Hudson (1975 : 21)

bでは No は用いられない。この文は感嘆文であり, 感嘆文は肯定でなければならぬからである。

13) 原文ではイタリック体。

参考文献

- Alexander, L. G. 1988. *Longman English Grammar*. London : Longman.
- Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances*. Oxford : Blackwell.
- Cattell, R. 1973. "Negative transportation and tag questions." *Language* 49, 612-639.
- Celce-Murcia, M. & D. Larsen-Freeman. 1983. *The Grammar Book*. Rowley: Newbury House.
- Declerck, R. 1992. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Huddleston, R. 1984. *Introduction to the Grammar of English*. CUP.
- Hudson, R. A. 1975. "The meaning of questions." *Language* 51, 1-31.
- McCawley, J. D. 1987. "The syntax of English echoes." *CLS* 23, 246-258.
- Quirk, R. et al. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London : Longman.
- Sperber, D. & D. Wilson. 1986. *Relevance : Communication and Cognition*. Oxford : Blackwell. (内田聖二他訳『関連性理論—伝達と認知』研究社出版 1993).
- Wilson, D. & D. Sperber. 1993. "Linguistic form and relevance." *Lingua* 90, 1-25.
- Wilson, D. 1994. "Communication and Relevance." Paper presented to the TEC Special Summer Lecture, Tokyo July 1994.

引用作品

- Ishiguro, K. *A Pale View of Hills* (1982).
- Martin, D. *Bring Me Children* (1992).